

物景觀の變化する有様を觀察するには、適當なる場所と云ふべし。

再び櫻草の記事に戻りて、此花の天然に於て著るしき變化を呈することを述べべし。尤も是れ新らしき事實には非ず。且誰にても少しく注意せば直ちに知り得る所なれども、春時櫻草を採りに行く人々は、徒らに其美しき花を採り去るのみにして、此花に夥しき變化の現はれたるを嘆賞するものは稀なり。變化の範圍を擧ぐれば左の如し。

花の着方（花序）の變化

花の大きさの變化

花の形の變化

花の色の變化

是れ著るしき點を擧げたるに止まり、細まかき點には涉らず。右の中にて特に目立つものは花の形にして、花冠の五裂せる普通のものゝ外に、六裂、七裂、八裂、九裂等あるのみならず、不規則に分裂せるもの、各裂片の形の種々に變化せるものあり。花の色は紅色の濃淡ある外に、絞り、筋入り、ほかし、縁取などあり。又殆ど白色のものあり。花の大小も亦種々にして、其大なるものと小なるものとの間には甚しき差異あり。其他彼のグルウヰン氏の示せる雌雄蓋の長短の如き、亦其比較的長さの種々なるを見るべし。（予は曩に此等の變化に就て觀察せるものに就き一々圖を作らしめたり。該圖の一部は近く出版すべき拙著中に載すべし）。

植物が野生の状態に於て著るしき變化を呈するものあるは已知の事實にして、敢へて奇とするに足らざれども、唯斯かる變化が櫻草の如く花の美麗なるものに於て起るときは頗る人の注意を惹くに足れり。野生の櫻草にして已に先天的變化の現出すること此の如く大なりとせば、培養せられたる櫻草が一層著甚なる變化を呈するに至れるは當然と云ふべし。櫻草の培養は古き頃より行はれ、昔の園藝書にも其品種の名を記し、又多數の品種を寫生したる圖譜の今日に存するものありて、之により此植物に於ける形態、色觀の變化の範圍を知るの便あり。

櫻草の花部の變化に關しては、古人も詳に記せるものあり。次に載する藤森大雅の文章（如不及齋文鈔卷之中三十五枚、明治三年版）の如き是れなり。尤も是れ培養種に就ての記事なれども、野生種に於ても亦之に準ずべし。文中「草櫻」とあるは櫻草の事なり。（家藏の同書稿本と此版本とを對照せるに文字全く相同じ。）

#### 記三浦氏草櫻

路歴忍城。訪芳川襄齋。聞市醫有三浦泊翁者。善培養草櫻多珍異。拉襄齋往觀焉。草櫻俗間所稱。余未詳漢名爲何。而其狀肖我邦櫻花。而色紅者其常也。今三浦氏之草櫻。其爲縹。有單有重有大有小。疎有密。其爲狀有如海棠者。有如金沙羅者。如醉醇者。如茉莉者。如麗春者。或如棗棠。或如梔子。其他殊類詭形不可縷狀。其爲色。

有紅有白有紫有碧。而紅有肉紅有嬌紅。有淡紅有鮮紅。有殷紅有粉紅。深紫淺紫不同其色。雪白月白各從其類。水碧石青。或暈或縹。或倒暈。或間雜。或色同而狀異。或形肖而彩殊。其爲品幾三百。栽以磁盆。盆各挿一小牌。以標其名。架閣三□。羅列於其上。前低而後昂。花彩爛斑。如張錦繡。奇異珍詭。過於所聞。余因問其術。翁曰是無他術也。能節其燥濕。時其寒溫。擇其肥土之物。勿過勿不及。如愛子如育嬰。而見其有稍異者。輒別而栽培之。使以成其異。見其有少珍者。則分而植養之。使以成其珍。如斯而已矣。大凡物之有珍異。不止草櫻也。唯其珍異者。尤難於栽培。而養之者不知其珍異分別而培養之。是以難有珍異不能自成其珍異。與凡卉同歸於朽。豈不悲哉。余聞而歎曰。翁蓋以諷世也。乃記之。

是より櫻草の保存に就いて述ふべし。前にも述べたる如く、東京附近の荒川沿岸の櫻草原野は、昔より名勝地として知られたるものにして、安永年間櫻草の培養の流行盛なりし時の如きは、其原産地方も亦益々顯はれ、人の遊覽するもの多くなれり。降って文政、天保以來の江戸遊覽案内記又は江戸郊外産物志の類には何れも櫻草の産地を記せり。例へば岩崎常正の武江産物志（文政六年）、忍川舎の花見の榮（天保四年）、きゝすのや編みやびの榮（天保六年）、順水庵の花鳥曆（安政五年）、岡山鳥の江戸名所花曆（天保八年）などの如きは、右産地として戸田原、尾久原、干住の野、野新田等を擧げたり、是等の櫻草原野は明治維新後も殆ど舊時の儘存在したるものにして、予の記憶せる所によりても明治二十年頃までは、戸田の原、浮間の原には櫻草多く發生し、美觀を呈せるが、それより二十年も後なる明治四十年頃になりては、是等の原野は著るしく舊時の趣を失ひ、櫻草少くなり、浮間の原の如きは變化殊更甚しく、殆ど櫻草を見る能はざるに至れり。是れ同地は近時名高くなりし荒川の櫻に近きが爲めに、花見の人々の廻覽するもの多く、随つて櫻草を根と共に採り去るが故なり。

浮間の原に次で戸田の原にても亦櫻草の甚少くなりしは蓋に採る者の増加せる故にして、植木屋などの採り去る外に、一般遊覽人殊に學校生徒の夥しく採るに由るなり。予は昔て或る新聞に某學校にて櫻草採集の爲め遠足會を催すに付き、生徒各自根掘りの籠の如きものを携ふべく言渡せる由を記せるを見たり。若し事實なりとせば、此の如きは天然紀念物の絶滅を奨励するものにして、不注意の至りと云ふべし。

櫻草は我邦各所に産するものに非ずして、其産地は自ら限られたれば、此點よりしても此植物の産地を保護するの必要あり。其上に前にも言へる如く、花部の變化に富み生態學上、遺傳學上、大切なる材料植物たれば、其保存を要するは言を俟たず。加之ならず其荒川沿岸に在るものゝ如きは、歴史的に著名なるものにして、現に帝都の郊外にありて、春時の美觀を形づくるものなれば、

公衆遊覧の爲めに完全なる保存を望まざるべからず。斯かる理由あるに拘らず、無意味又は私慾の爲めに擅に之を採去るは甚忌むべきことにして、殊に其夥しく採集したるものは、大半途中に遺棄せられ、又縦令持歸りて庭園に植うるも、土質其他の関係よりして十分なる成長を遂ぐる能はざるに於いてをや。

監採の結果によりて、東京に接近せる郊外には、今日にては早晩此愛すべき花草の痕を絶たんとするに至れり。荒川沿岸地方中、稍、遠き處には尚此花草の多く生せる原野なきに非ざれども、是とても後には同様の運せる原野なきに非ざれども、是とても後には同様の運命に陥るや明なり。是れ此植物の保存が今日に急なる所以なるが、而かも之を保存するには、唯此植物のみに止まらずして其發生する原野即ち櫻草原野全體を保存せざれば効なし。何となれば前にも言へる如く、櫻草原野には獨櫻草のみならず、他にも種々固有なる植物を産し、共に一の自然群落を成し、共に生存すればなり、故に此群落を保存するの必要あり。美観上よりしても亦該原野に生ずる他の花草は其形容色彩の美妙なる配合によりて

共に櫻草の美を成せり。

此外に尚櫻草原野全體を保存する大切なる理由は、土地其物の現状維持を期するにあり。即ち是等の原野にして一朝開墾せられ、田畠に利用せらるるか、忽にして櫻草其他固有の花草は絶滅するに至るべし。是れ最も恐るべき變化にして、前に挙げたる濫採によりて起る變化よりも極めて直接なり。現に予の知れる櫻草原野の比較的完全に今日に遺れるものの中にて、斯かる土地利用の爲めに次第に消滅せんとするものあり。是れ豈學門上及び名勝上惜しむべきことならずや。

櫻草原野に生ずる櫻草並に之に伴ふ花草は、天然紀念物として保存すべきものとすれば、是等の原野の中にて最も完全なるものを選び、天然保護區域として指定するを最も適當なりと思ふ。斯くなれば、原野は其自然の状態を失はずして、完全に遺り、所生の植物は永遠に絶ゆることなからん。保存指定區域内には固より變化を及ぼすを許さざるも、是等の原野に於て縦來行なへる秋時の萱苳は毫も不可なし。是れ春時に於ける櫻草其他の野草の發生に害なきのみならず、却って益あればなり。

(大正八年七月十日稿)

## 長野県佐久市のサクラソウ自生地

国の特別天然記念物指定を受けているサクラソウの自生地は田島ヶ原ですが、サクラソウの自生地は各地にまだたくさんあります。「さくらそう通信」でも、これまでに群馬県新里村、岩手県一戸町をご紹介してきました。

今回、写真でご紹介する自生地は長野県佐久市の南部、谷川沿いの廃田にあります。かなり湿潤な土地で、多彩な湿生植物と共に自生しているのですが、私たちが訪れた時（6月初頭）は、ちょうど開花期の終わりがちだったようです。



佐久市のサクラソウ



湿地に広がる自生地

さくらそう通信 9号

平成12年3月21日

編集・発行 浦和市教育委員会

浦和市常盤6-4-4

☎048-829-1796



題字 教育長 浅見 匡